2）繁殖状況

鳥類の繁殖期である5月・7月に調査を行い、繁殖状況を把握した。繁殖に関わる行動等としては、ヒヨドリ・スズメで巣立ちビナが確認された。また、ホトトギス・キビタキ・メジロ・シジュウカラ・ホオジロは囀りを確認したが、メジロ・シジュウカラ以外は7月には確認できなかった。この他5月と7月に共通に確認された種はコジュケイ・コゲラ・エナガ等9種であった。

これらから調査地で繁殖している可能性が高い種は、いずれも留鳥のコジュケイ・キジバト・シジュウカラなどの 10 種と推定される。このうち特に、コジュケイ・メジロ・エナガ・シジュウカラは森林への依存度が高い種である。

繁殖の可能性が高い種

コジュケイ・キジバト・コゲラ・ヒヨドリ・モズ・エナガ・
シジュウカラ・メジロ・スズメ・ハシボソガラス

3）注目すべき種

今回の調査で「天然記念物」「種の保存法」「レッドリスト」に該当する種は、上空を通過したチュウサギ（レッドリスト準絶滅危惧種）のみで、調査地に生息している鳥類では、特に注目すべき鳥類は確認できなかった。

【チュウサギ】

主に夏鳥として渡来し、本州～九州で繁殖する。水田や湿地で魚類や小動物を食べる。調査地の展望台上空を、南から北へ飛翔していく1個体を観察した。相生山には生息していないと考えられる。

（4）鳥類生息環境特性

調査の結果、調査地では 43 種の鳥類を確認した。確認された鳥類の多くは、市街地や丘陵地の森林で普通に見られる種であり、偶然上空を通過したチュウサギを除いて、特に希少種等の注目すべき種は確認されなかった。

調査地は、本来は人の手が加わることによって多様な生物が生息する、コナラやアカマツなどの二次林からなる我が国特有の里山であったはずである。

ところが、食物連鎖の頂点に位置する猛禽類が1度も確認されていないということは、餌となる生き物が少なくなっており、すでに相生山の生態系が貧弱化あるいは不安定になっているということを表しているのかもしれない。この原因は相生山の森林が、市街化等の開発により孤立化してしまったこと、相生山に人の手が加わらなくなり、里山の多様性が失われつつあるためと思われる。